



例えば、君が。

目の前の彼はそう呟き、目を伏せた。黒く長い睫毛が影を落とす。私は何も言わない。

いなくなったら。

長い睫毛が、震えている。何がそんなに哀しいの。なんて聞くわけでもなく、私はやはり何も言わない。段々と淡いブルーに染まる夕方の世界に、ぽつんと彼は立っている。はらはらと彼の傷み一つない黒髪が揺れて、私の首に巻き付いたマフラーもぱたりと揺れた。

僕は、死ぬかもしれない。

ふと、彼の瞳が私を捕らえる。ああ、綺麗な瞳だ。私はそれでも何も言わず、彼に手を伸ばす。ぴくりと震える彼の頬をそっと撫でれば彼は情けなく眉を下げた。

――じゃあ、私を殺せばいい。

ブルーに染まる世界、私の声がひたりと落ちて行くのを、彼はどう捕らえたのだろうか。